

3月24日（日）いばキラステーションゲストコーナー

MC：

本日は、

ゲストとして、国家公務員共済組合連合会水府病院の看護師

中西京子（ナカニシキョウコ）さん、

筑波大学社会・国際学群社会学類社会学主専攻2年 新聞編集長の

原啓一郎（ハラケイイチロウ）さんのお二人をお迎えして

お二人が取り組んでいるNOKYOKOプロジェクトについて

お話をいただきたいと思います。

よろしく申し上げます。

NOKYOKO&原：

よろしく申し上げます。

MC：

まず、中西さんと原さんのご関係をご説明ください。

原：私は筑波大学で大学新聞を編集しているのですが、医療や病院、とくに看護師が地域経済に貢献するという活動に興味を持ち、取材をしたことが出会いのきっかけです。いまは中西さんのプロジェクトに共感し、陰ながら普及活動のお手伝いをしています。

MC：

では、

NOKYOKOプロジェクトという名前が付けられていますが、

その狙いはどんなものですか？

NOKYOKO：

はい。

単刀直入に言いますと、「医療従事者を増やしたい」ということです。

少子高齢化時代に入り、病院や医療を必要とする人たちが増え、地方は医師など慢性的な医療従事者不足が続いています。とくに茨城は医師、看護師の充足率が全国ワースト2という深刻な状況が続いています。

私の看護師の場合はというと、女の子の「憧れの職業」で常に上位なのですが、潜在看護師、つまり看護師の国家資格を取得しても「看護職に就かない人たち」

が増えています。それは「病院看護の仕事の価値」が見えにくく、看護師の社会的評価が低いことが原因だと考えられます。

ところが、昨今の医療改革（フリップできれば昨今の医療改革）は、病院や医療の本来あるべき姿を問い直し、病院や医療がその原点に立ち返る絶好のチャンスと捉えることが出来ます。

ポイントは3つあります。一つは、わが国固有の「国民皆保険」の「制度理念」に一致し、病院や医療が健康な人たちを含めた、地域住民みんなのものであるという考え方です。二つ目は、入院患者の平均在院日数の短縮など、患者ニーズに立脚した、患者さん中心の医療の実現です。3つ目が、医師一人当たりの生産性を高めるためのチーム医療の拡大です。

その結果、病院や医療に新たな魅力や可能性が生まれつつあります。

私は「看護力を、経営力に」をスローガンに病院経営の効率化に努める一方、地域住民のみなさんに、この、生まれ変わろうとしている病院や医療の姿をわかりやすく、正しく伝えることが肝要だと考え、実践してきました。

MC :

原さんはどうお感じになりますか？

原 :

実は私の父も医者なのですが、将来はいわゆる医療関係ではなく、人と接することが好きだったこともあり、社会学を専攻しました。選択肢に医師はなかったんです。

NOKYOKO :

医療がひとつの「職業」として選ばれるには、やはり健常者、つまり一般社会の人々によく理解してもらえることが大切だと思っています。

そんな中で、NOKYOKO プロジェクトでは「病院力を、地域力に。」病院や医療が患者だけでなく、健康な人たちの日常生活と分け隔てなくつながることを目指しています。そんな社会が実現した時、初めて本当の意味で医療が「感謝される仕事」「役に立つ仕事」になるんだと思っています。

原 :

病院や医療は、経済の常識では社会的コストと見られがちです。  
しかしながら、医療や病院そのものが直接的に生産力になり、雇用を生むと  
したら、  
医療関係者不足が解消するだけでなく、  
必然的に優秀な人材を確保できるのではないのでしょうか。  
コストと見られがちな医療の効率化も図れるのではないかと思います。